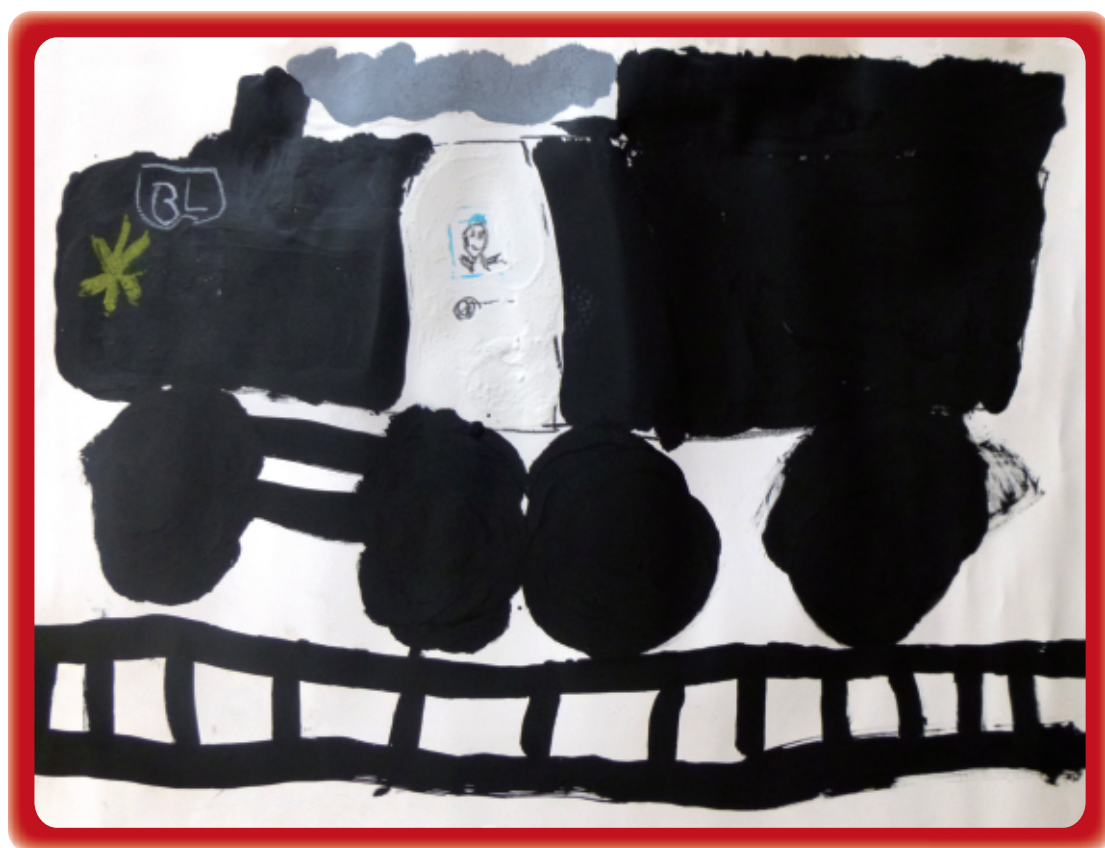


# KYOKY 131

**特集** 京都教育大学における特別支援教育の  
取り組みについて



京都教育大学

<表紙>

『スチーム号に乗って』

附属幼稚園 5歳児 安田拓生

「機関車の運転席に乗ったのが、楽しかったよ！」

<裏表紙>

『幼稚園のブンチョウ』

附属幼稚園 4歳児 大森 奏

「ブンチョウのお母さんが卵を産んだよ。」



# CONTENTS



<表紙> 附属幼稚園 5歳児 安田 拓生  
<裏表紙> 附属幼稚園 4歳児 大森 奏

## 特集

- 2 <京都教育大学における特別支援教育の取り組みについて>  
なぜ今、特別支援教育なのか  
—特別支援教育GPからのスタート—  
発達障害学科教授  
佐藤 克敏
- 3 特別支援教育臨床実践センターの果たす役割  
特別支援教育臨床実践センター教授  
相澤 雅文
- 7 京都教育大学における学生支援について  
発達障害学科教授  
郷間 英世

## 海外見聞録

- 9 国際地理オリンピック (iGeo)  
ケルン大会に参加して  
社会科学科教授  
香川 貴志

## 留学生の声

- 11 日本で正解でした！  
教員研修留学生  
ステファン・ランドリアマナンツァ  
(マダガスカル共和国出身)

## 研究余滴

- 13 トップクォークからヒッグスへ  
理学科准教授  
高嶋 隆一

## 京教今昔物語

- 15 附属高等学校へのオマージュ  
～三年+二十六年を振り返って～  
京都教育大学附属高等学校副校長  
斉藤 正治

## 京教学内探訪

- 20 野鳥を楽しむ  
理学科教授  
坂東 忠司

## 附属学校園だより

- 22 新教科  
「メディア・コミュニケーション科」  
京都教育大学附属桃山小学校副校長  
西井 薫
- 23 学びの主体性を育む連携教育  
～幼小中の交流を通して～  
京都教育大学附属桃山中学校副校長  
高木 英男
- 24 “イチョウ”と共にある幼稚園の生活  
秋～冬編  
京都教育大学附属幼稚園副園長  
斎藤 真由美

## 新任の先生から

- 25 ものづくりは人づくり  
産業技術科学科准教授  
原田 信一
- 25 美術科准教授  
日野 陽子
- 26 Stay positive.  
発達障害学科講師  
佐藤 美幸
- 26 学生とともに日本語を  
考えていきたいと思ひます。  
国文学科講師  
中俣 尚己

## 卒業生の声

- 27 幼稚園の先生になって  
京都教育大学附属幼稚園 教諭  
外蘭 知子
- 27 自分と出会った一年間  
吹田市立江坂大池小学校 教諭  
小松 優子

## ようこそ大先輩

- 28 学生として、教官として過ごした  
京都教育大  
京都教育大学名誉教授  
京都教育大学同窓会理事  
杉本 弘子

## 読者の皆さまへ・編集後記

- 29 地域連携・広報委員会委員長  
細川 友秀

# なぜ今、特別支援教育なのか —特別支援教育GPからのスタート—

発達障害学科教授 佐藤 克敏

平成19年に特別支援教育が法的に位置づけられたことから、全ての学校種において、特別支援教育を推進することが求められるようになりました。特別支援教育は、幼児児童生徒一人一人の教育的ニーズを把握し、その持てる力を高め、生活や学習上の困難を改善又は克服するため、適切な指導及び必要な支援を行うものです。これにより、通級による指導、特別支援学級、特別支援学校だけでなく、通常の学級においても、校内委員会を設置し、特別支援教育コーディネーターを中心として、学校全体で特別支援教育について取り組むこと、実行性と教育効果を高めるために、障害のある幼児児童生徒の実態の把握や個別の指導計画、教育支援計画の作成と計画に基づいた教育を実施すること、などが求められるようになりました。

以上の経緯を踏まえ、京都教育大学では、平成19年度後期から「KYOの特別支援教育トライアングルプラン」というテーマで、「特別支援学校若手リーダー養成プログラム」「特別支援教育のスペシャリスト養成プログラム」といった学生及び現職教員の特別支援教育に対するスキルアップをはかる取組を実施しました。本取組みは、文部科学省から特別支援教育GPの予算を得て、「京都教育大学特別支援教育臨床

実践センター、京都府・京都市教育委員会、学校の3者が協働して、特別支援学校の若手リーダーや特別支援教育のスペシャリストを養成すること」を目的としたものでした。

取組の成果と課題として、「特別支援学校若手リーダー養成プログラム」では、今後の取組につながるプログラムの開発ができたことから、一定の成果がみられました。しかしながら、スタディー・サポーターとして活動した学生の数は少なく、十分な対応はできなかったこと、学校ボランティアに参加する多くの学生が特別支援の必要な児童生徒に関わることも多く、授業と連動させた、よりフレキシブルなシステムを考えていくことが学生のニーズに対応できる方法であることが指摘されました。一方、「特別支援教育のスペシャリスト養成プログラム」では、プログラムに参加した参加者の評価は高く、講座においては、100名から200名を超える参加者がありました。このような経過から、今後も継続して取り組む必要があること、通常の学級の中で他の幼児児童生徒との関係をふまえた授業づくりや授業改善、教員間の間での協同の方法、現職教員のアフターケアに関する研修などが必要であると考えられました。



「KYOの特別支援教育トライアングルプラン」パンフレットの1部

# 特別支援教育臨床実践センターの果たす役割

特別支援教育臨床実践センター教授 相澤 雅文

## 1. 特別支援教育臨床実践センターの歩み

京都教育大学附属臨床実践センター機構特別支援教育臨床実践センター（以下「特別支援教育臨床実践センター」と略記）は平成19（2007）年7月に発足しました。この年は特殊教育から特別支援教育に転換された「特別支援教育元年」とも呼べる年であり、言うまでもなく特別支援教育の充実発展を期して立ち上げられた機関であります。「特別支援」を冠する大学の教育研究施設として学内外を問わず、広く社会に開かれたセンターとしての役割が期待されています。

特別支援教育臨床実践センターは、京都府・市の教育委員会や医療機関、福祉機関等と連携し、地域の「気になる」子ども等を対象とした発達相談や現職教員の研修等による地域貢献、臨床指導における学生の専門的な技能の向上、附属学校園等や近隣の学校園に対する相談・支援及び通常学級における発達の「気になる」児童生徒等の教育評価、指導方法等の開発と検証を行う機関として活動してきました（図1）。平成

22（2010）年には増改修工事がおこなわれ、図2のような施設となっています。以下、具体的な取り組みについてご紹介していきます。

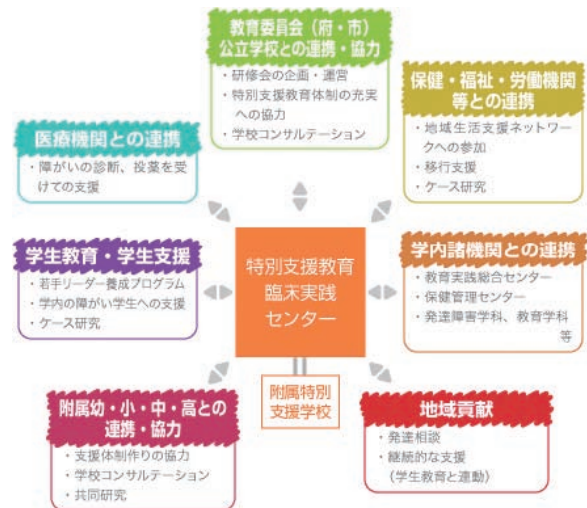


図1 特別支援教育臨床実践センターの役割



図2 特別支援教育臨床実践センターの概要

## 2. 特別支援教育の理解・啓発活動

### (1) 特別支援教育に関するハンドブックの作成

#### ①『特別支援教育ハンドブック』(2009年)

学校において特別支援教育を推進するための手引き、もしくは資料として活用できるものとして作成したものです。

第1部は、幼児期、児童期、青年期の発達障害のある子どもたちの特徴や基本的な対応、医学的な課題と対応について示しました。第2部は、特別支援教育を進める上でポイントとなる、気づき、保護者とのコミュニケーション、学級経営、授業づくり、個別の指導計画作成、特別支援教育の年間計画表について解説しました。第3部は、コーディネーションやコンサルテーション、校内・外のリソースの活用、移行・進路に向けた取組について解説しました。このハンドブックは京都市及び京都府の全ての小・中学校の教員に配布されました。



#### ②『一教員志望の学生のためのー 特別支援教育ハンドブック』(2011年)

京都教育大学で教職を目指して学んでいる学生・大学院生を対象に、特別支援教育についての理解と啓発を行うことを目的として作成しました。

特別支援教育臨床実践センターと発達障害学科の教員だけではなく、教科教育や心理学、附属学校園の先生方からも執筆して頂きました。幼稚園や小学校、中学校、高等学校においても特別支援教育の理解は教師の資質として求められるものになっています。障害のある子どもだけでなく、「気になる子」についても、日常から適切に把握と理解を行い、支援の方策について考えていく必要があります。このハンドブックは京都教育大学の学生・大学院生・特別専攻科生全員に配布されました。



#### ③『一保護者のためのー 子育て・子育てハンドブック』(2012年)

子どもの成長・発達には保護者にとっての大きな喜びです。しかし、中には「周りの子どもとは何か違う」

と感じられ「気になる子」がいることも確かです。そこで一般的な子どもの成長の特徴と共に、いわゆる「気になる子」への理解のあり方について保護者と一緒に考えたいと思って作成しました。

幼児期、児童期、そして青年期にある子どもの「困り感」への対応は周囲の理解が不可欠です。このハンドブックは京都教育大学の7つの附属学校園（幼稚園1園、小学校2校、中学校2校、高等学校1校、特別支援学校1校）の全ての保護者に配布されました。



#### ④『特別支援教育テキスト』(2013年)

平成25年度は奈良教育大学と連携し『特別支援教育テキスト』を刊行いたしました。これは、それぞれの大学の特別支援教育に関する授業の中で活用していきます。

### (2) 特別支援教育シンポジウム・特別支援教育セミナーの開催

特別支援教育臨床実践センターは、京都府・京都市教育委員会、学校現場、保護者等との連携・協働を進め、広く社会への貢献を目的に設置された機関です。

特別支援教育にかかわる多様なニーズを把握し、教職員の研修やスキルアップの支援、発達障がいのある子どもへの指導力向上のための様々な研修を計画的に設定していくことも本センターの大きな役割となっています。特別支援教育は、対象となる発達障がいのある子どもへのアセスメント、理解から始まり、教材・教具や指導法の工夫、開発、実践といった地道な作業の連続です。一人ひとりの実態はそれぞれ異なり、またその子を取り巻く人々や環境も異なります。まさにオーダーメイドの教育をどのように構築していくのが問われています。これまで表1のような教育現場のニーズに対応した研修会の企画を行ってきました。

## 3. 大学と地域との連携および地域貢献

### (1) 附属学校園との連携・協力

地域貢献の一環として京都教育大学附属特別支援学校と連携し、地域の発達障がいのある児童・生徒を対象とした小集団活動を実施しています。小集団活動は大学院生、学部生が参加し、教職に関する臨床実習の場ともなっています。この療育活動は、臨床実践センターにおける活動とともに、附属特別支援学校を会場

表1 特別支援教育臨床実践センターが主催した研修会

| 年度等      | 内容・講師等   |   |
|----------|--|---|
| 平成19年2月  | シンポジウム「KYOの特別支援教育トライアングルプラン」<br>—特別支援教育臨床実践センター・教育委員会・学校による教員養成—<br>パネリスト：青山芳文氏（京都府総合教育センター）<br>朝比奈覚順氏（京都市教育委員会）<br>相澤雅文（京都教育大学附属特別支援教育臨床実践センター） |   |
|          | 講演「今始まった特別支援教育の展開と課題-新しい発達障害の理解と支援をめぐる-」<br>東京学芸大学 上野一彦氏   |   |
| 平成20年9月  | 講演「発達障がい者の就労を考える」<br>宇都宮大学教育学部 梅永雄二氏   |   |
| 平成20年11月 | シンポジウム「今後の特別支援教育推進における大学の役割」<br>パネリスト：松永磨さん（京都教育大学大学院）<br>高橋広行氏（宇治市立岡屋小学校）<br>上村隆氏（京都市立西京極小学校）   |   |
|          | 講演「チーム援助に基づく特別支援教育 —学校心理学の立場から—」<br>筑波大学 石隈利紀氏   |   |
| 平成20年12月 | 講演「LD児の読み・書き指導」<br>東京学芸大学 小池敏英氏  |   |
| 平成21年2月  | 講演「気になる子どものアセスメントとその支援」<br>東北大学大学院教育学研究科 本郷一夫氏   |   |
| 平成21年11月 | シンポジウム「『特別支援教育』にかかわる全学的教員養成システムの開発」  |   |
|          | 【話題提供】<br>木下幹雄氏<br>（京都教育大学附属特別支援学校）<br>湯浅恭正氏（大阪市立大学）<br>郷間英世氏（京都教育大学）<br>佐藤克敏氏（京都教育大学）<br>【指定討論】 田中良三氏（愛知県立大学）                                   | 【話題提供】<br>水谷宗行氏（京都教育大学）<br>梶原裕二氏（京都教育大学）<br>井上えり子氏（京都教育大学）<br>田中道治氏（京都教育大学）<br>【指定討論】 吉川一義氏（金沢大学）                             |
| 平成23年1月  | シンポジウム「特別支援教育と教科教育との融合」 2日間開催  |   |
|          | 一日目「国語の授業づくり」<br>【話題提供】<br>寺田守氏（京都教育大学）<br>稲田八穂氏（北九州市立朽網小学校）<br>丸山啓史氏（京都教育大学）<br>【指定討論】<br>玉村公二氏（奈良教育大学）   | 二日目「算数の授業づくり」<br>【話題提供】<br>加藤久恵氏（兵庫教育大学）<br>植田悦司氏（兵庫教育大学附属小学校）<br>田中道治氏（京都教育大学）<br>【指定討論】<br>大谷和大氏（大阪大学大学院）<br>山村麻予氏（大阪大学大学院） |
| 平成23年6月  | 講演「インクルーシブ教育とはなにか？ —障害者権利条約と特別支援教育—」<br>宮城教育大学名誉教授 清水貞夫氏   |   |
| 平成23年7月  | 講演「楽しい理科の授業をめざして」<br>沖縄大学 盛口満氏   |   |
| 平成23年10月 | 「特別支援教育と通常教育の融合」—授業のユニバーサルデザイン研究会の取組を中心に<br>国立特別支援教育総合研究所 廣瀬由美子氏   |   |
| 平成23年11月 | 「大学における障害学生のサポートシステムについて」<br>国立台湾師範大学 王華沛氏   |   |
| 平成23年12月 | シンポジウム「特別支援教育と教員養成カリキュラム」<br>【話題提供】：是永かな子氏（高知大学）<br>園田貴章氏（佐賀大学）<br>伊藤友彦氏（東京学芸大学）   |   |
| 平成24年6月  | 「ソーシャルスキルトレーニングの基礎基本」—SSTをどう組み立てるか—<br>近畿大学総合社会学部 大対香奈子氏   |   |
| 平成24年11月 | 「特別支援教育における授業づくりと教材開発」—国語と算数の指導を中心に—<br>茨城大学 新井英靖氏   |   |
| 平成24年12月 | 「特別なニーズのある子どもの保護者支援」<br>東京女子大学 前川あさ美氏  |   |

※所属等は当時のもの

としたサマーキャンプ、ウィンターキャンプを実施してきました。児童・生徒が「楽しい」と感じる活動を通して、子ども同士や子どもと学生間の関係づくり、児童の自己実現の場となることを目的としています。児童の行動変容はもとより、学生にとっても子どもたちとのかかわりの中から障がい理解へつながる貴重な場となっています。

また、附属特別支援学校と連携して、附属学校園の特別支援教育コーディネーター連絡会を組織しています。附属学校園への巡回相談を実施したり、事例検討会を開催したりしています。



図3 附属特別支援学校を会場としたサマーキャンプ

## (2) 地域に根ざした発達相談事業

特別支援教育臨床実践センターでは、子育てに悩みや課題を持たれている保護者の方々のニーズに応じての発達相談を行っています。対象児の行動観察及び心理テスト・発達テスト等による実態把握、発達課題に向けた療育・指導、コンサルテーション等を実施しています。

相談数は毎年300件前後となっています。

表2 特別支援教育臨床実践センター発達相談件数 (人)

|    | H20年度 | H21年度 | H22年度 | H23年度 | H24年度 |
|----|-------|-------|-------|-------|-------|
| 男子 | 305   | 201   | 152   | 232   | 235   |
| 女子 | 62    | 112   | 99    | 95    | 79    |
| 計  | 367   | 313   | 251   | 327   | 314   |

※H24年度は2月1日現在

## (3) 地域と連携したサテライト小集団活動

小集団活動は、学校(学級)小さな集団の中で友達と楽しく遊びながら、人と関わることの楽しさを感じてもらうことを目的として行う活動です。友達との関わりを深めることや、大人との信頼関係を培うことが将来の生活にとっても大切な経験になると考えてのことです。特別支援教育臨床実践センターでは、学内において平成20(2008)年度から小集団活動を小学生や中学生、高校生を対象として実施してきました。

小集団活動を京都府北部地域(福知山市)において実施しようとする試みがサテライト小集団活動です。京都府福知山市では、文部科学省指定のグランドモデル事業を受け、小学校5年生を対象として生活満足度調査を実施してきました。その事後支援の場、そして学童保育を終えた児童の行き場所としての小集団活動に連携して取り組むこととなりました。

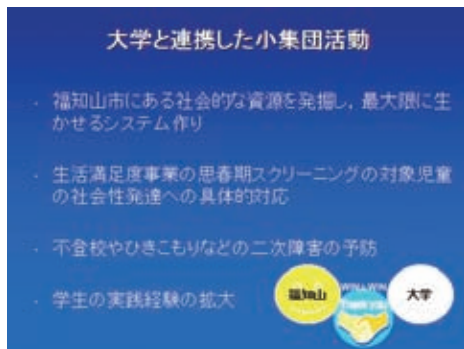


図4 サテライト小集団活動の目指すもの

小集団活動の実施にあたっては、福知山市教育委員会学校教育課、京都府中丹西保健所、社会福祉法人成美大学、福知山高校、京都教育大学特別支援教育臨床実践センター・発達障害学科とで連携・協力しながら活動を進めてきました。スタッフには大学関係者(京都教育大学、成美大学)、教育委員会、保育士、教員、

保健師、医師、臨床心理士、京都教育大学学生(院生)、学生ボランティア(地元の高校生、大学生)などがたずさわっています。



図5 小集団活動の連携体制

集団適応に難しさのある子ども達であっても、小集団活動の中では本来の生き生きとした自分らしさが表現できています。平成25(2013)年からは地域の社会福祉法人が中心となつての活動に移行していきます。

## (4) ペアレント・トレーニングの実施

子育てには悩みがつきものです。発達相談の際、保護者の方は「どうしてこんなことができないのかな」や「もう少し言うことを聞いてくれたら」と思ってしまう、ということをよく話されます。「自分の子育てに自信が持てず振り回されてしまうことがある」とも言われます。親子が望ましい関係を築き、深めていくことを目的とした「ペアレント・トレーニング」というものがあります。子育てには親子関係が大きく影響しており、「親が分かってくれている」、「親が信頼してくれている」といった、親子の信頼関係を築くことが大切なのです。

小学校の協力を得て、センタースタッフがその小学校に伺い、5~7名の保護者を対象に5回シリーズのデリバリー型「ペアレント・トレーニング」を実施しています。取り組みを通じて親子間のコミュニケーションのあり方を、一緒に考えたり話し合いなどを行ったりすることで小学校の保護者等を対象に子育て支援を実施してきました。



図6 ペアレント・トレーニングの実施



# 京都教育大学における学生支援について

発達障害学科教授 郷 間 英 世

近年、学生生活に困難を示す大学生が増えてきているように思われます。その中には、発達障害の特徴を有し、修学面や対人面で困難をきたしている場合や、そのために二次的に不安や抑うつ状態に陥っている場合も少なくありません。特別支援教育臨床実践センターでは発達障害学科や保健管理センターなどと協力しながら、そのような学生への支援のあり方を検討してきました。今回はその中から、学生生活アンケート調査および相談支援について紹介します。

## 1. 学生生活アンケート調査について

平成21年度から、保健管理センターと特別支援教育臨床実践センターが連携して全学生を対象に、「学生生活で困ったこと心配なことに関する質問票」というアンケート調査を行ってきました。アンケートの内容は、友人関係や大学の講義や実習の履修に関することなどで、質問項目の一部を次に示します。

表 質問項目例

---

友達とのつきあい方がわからないと感じる。  
 気持ちの切り替えがうまく行かない。  
 レポートや宿題に集中できず期日に間に合わない。  
 大切な話を聞き逃す。  
 突然カッとなってしまう。  
 文字や文章を読み間違える。  
 誤字、脱字がある。  
 将来のことを考えると不安になる。  
 自分はダメな人間だと思ってしまう。

---

このアンケートの結果は、統計的な分析とともに、学生面談や相談の際にサポートを考える資料として利用することを目的としています。また、アンケートの最後で、困ったことや心配事についての相談希望者は、保健管理センターを窓口にして相談を受け付けていることも案内しました。

平成22年のアンケート調査をもとに1214名の学生の回答を分析した結果では、男子学生と女子学生の違いでは、「友達との付き合い方がわからないと感じる」「周りから孤立していると感じる」「友達との雑談に入っていけない」など対人関係に関する項目や「文字や文章を読み間違える」「誤字・脱字がある」「計算を間違える」などの学習に関する項目、および「講義

や授業を聴きながらノートをとることができない」「話を聞き間違える」「自分の意見を交えてレポートを書くことが難しいと感じる」などの修学上の困難に関する項目で、男子学生のほうが得点が高く、これらの項目では男子学生が女子学生より困難さが大きいこと示していました。

学年差については、1回生が他の学年よりも多くの内容で困難を感じやすいという結果でした。この調査は春に実施しており、1回生は大学に入学したばかりで、大学生活に対し不安や混乱を感じていることが原因だろうと推測されました。

全体としては、学生生活上の困難をあまり感じていない学生が大多数でしたが、対人関係や修学上の困難などを感じていたり不安や抑うつなどの心理的課題を持つものなども10%前後認められました。この中には発達障害の特徴を有し学生生活に困難を抱えている学生が多く含まれていると思われ、特別支援教育からの理解と支援が必要と考えられました。このアンケート結果の詳細については「LD研究」第21巻125-33ページを参照いただければと思います。このアンケート調査は継続的に行われ、今年度はこれまでの検討結果をもとに、生活上の困難さがより顕著に表れてくる実地教育・教育実習の場での学生支援を充実させるための方法の検討をしています。

## 2. 学生支援や相談について

発達障害の特徴を持つ学生自身が相談や支援を希望してきたり、保健管理センターなどの大学内相談機関から紹介されて相談をするケースもここ数年増えているように思います。それらの相談の中には、1) 自己理解のある学生の場合と、2) 自己理解がなく困難さが自分の努力不足に原因があると思って悩んでいる場合があります。

自己理解のある場合は、学生生活を送る上での自分の不得意な点や弱点を理解できているので、対人面や修学のための安定した生活が送れるような支援を考えていくことが可能です。たとえば、グループで討議をしたり意見を言ったりするのが苦手な場合は、同じグループの中に本人の特性をよく知っている学生を入れてサポートしてもらおうと困難が軽減したりします。また、計画的に物事を進められず、レポートや宿題が期日に間に合わないなら、本人の状態に合わせて

期日のチェックを行ったり、レポートの期日を伸ばしてもらいなどの配慮をしていくことも必要になります。

自己理解がなく、自分に原因があると思って悩んでいる場合は、まず自己理解を促すことが大切です。具体的には、学生生活上の困難は、本人の性格や努力不足のためではなく、脳機能のアンバランスさから生じているという理解です。たとえば、学業上は優秀でも対人面に課題がある場合は、自分の持つ特性をよく理解することから始め、比較的自由さの多い学生時代に、必要な支援を受けながら社会に出てゆくスキ

ルを身につけていくことが大切です。時には、どのような職業が向いているのかを考えていくことが必要になることもあります。

一見しただけでは、普通の学生と変わりはないのですが、同級生が当たり前に行えることでもなかなかできなったりします。学校生活のさまざまな場面で支障をきたしている場合も、ほんの少しの理解や工夫で問題なく生活している人もいます。私たちは、大学全体としての支援と個別の支援をどちらも充実させていくことが大切と思っています。



# 国際地理オリンピック (iGeo) ケルン大会に参加して

社会科学科教授 香川 貴志

## 国際地理オリンピックとは？

国際地理オリンピック（以下、iGeoと記す）は、1996年に第1回国際大会がオランダのハーグで開かれ、以後2年ごとに開催されてきた。また、2007年に第1回AP（アジア太平洋）大会が台湾の新竹で開催され、これ以降は偶数年が国際大会、奇数年がAP大会という順序で毎年開催されている。どちらの大会も国際地理学連合（IGU）の下で実施され、地理教育分野がアカデミック地理学の場でも高いステータスを誇っていることが分かる。選手は中等教育在学中または高等教育未就学の19歳までが条件で、高校生が中心である。

日本は2007年以降、国内予選（iGeo日本選手権）で選抜した4名で代表チームを編成して継続的に参加してきた。チームとして参加するものの、競技はすべて個人戦である。競技における公用語は英語である。この点が他の科学オリンピック、たとえば数学、物理、化学、生物、地学、情報などが翻訳を経た日本語で設問と対峙して日本語で解答できるのと大きく異なっている。日本の参戦が遅れたことも、メダルが簡単に獲れないのも、英語の障壁が小さくない。それは引率業務に携わるわれわれにとっても同じである。

## 2012年ケルン大会への道のり

ケルンを目指しての日本選手権は志願者が627名で、ここから2回の試験を経て、わずか4名の精鋭が選ばれた。無料で受験できる日本選手権は志願者を年々増加させているが、諸外国では日本の10倍近くの志願者を集める国もある。またメキシコでは、国内予選の最終試験がテレビ中継されるほど注目度が高い。

選手4人は関東地区から2名、近畿地区から1名、中国地区から1名が集まった。彼ら（全員が男子で、高3が3名、高2が1名）は、2012年6月に奈良市と木津川市で実施した国内強化合宿を一緒に過ごし、大会本部からの宿題を協力して仕上げ、大会本部から到着した。

## 現地での強化合宿

われわれが大会2日前に現地入りして強化合宿をし

たのは、2011年7月にメキシコのユカタン半島メリダで開催された第3回AP大会で無冠の惨敗を喫したことから、その二の轍を踏まないよう万全を期したからである。先行して現地入りしていた生活担当リーダーの大谷誠一氏（神奈川県中学校教員）は、デュッセルドルフ日本人学校での勤務経験もあり、われわれは実りの多い現地強化合宿を無事に終えることができた。そして、この強化合宿最終日の8月21日がiGeoケルン大会の受付開始日であった。いよいよ本番が始まる！

## ケルン大会の様子

開会式の翌22日から5日間におよぶ大会が開幕した。選手総数は124名であった。競技テストは前半に集められ、後半は選手たちによる国際親善行事、選手たちや採点者のためのエクスカージョン（遠足）だった。テストが前半に集中しているのは採点に時間を要するためである。筆者はInternational Businessリーダーという役柄で、おもに採点や大会運営に従事した。室内で英語漬けになるため、タフさが要求され、フィールド好きの私には少々苦痛であった。

テストは記述・論述式のライティングテスト（WRT、写真2）、フィールドでの現地観察・地図作成・意思決定（提案）からなるフィールドワークテスト（FWT、写真3）、センター試験と似た選択解答によるマルチメディアテスト（MMT）からなる。日本人選手はMMTで全員が上位グループに入れるのが常であるが、WRTとFWTでは相当に苦戦する。今回の最終成績でも、日本チームは銅メダリスト1名に終わった。なお、他の科学オリンピックと同様に、選手総数の約10%に金メダル、約15%に銀メダル、約25%に銅メダルが授与される。



写真1 ケルン大聖堂、ライン川、ホーエンツォレルン橋（筆者撮影）ケルンを代表する景観3点セットからなる象徴的アングル。



写真2 ケルン大学でのライティングテスト開始直前、緊張のひとつとき（筆者撮影）机には問題冊子のほかに資料が山積みされ、記憶力よりも考察力や応用力が試される。



写真3 フィールドワークテスト直前の口頭説明（筆者撮影）マイクを使わずにすべて英語で行われる。説明役も、聴き役も大変！

こうした状況は、高校入試や大学入試の出題内容が、知識偏重になっていること、つまり中学校では高校入試に向けて知識を詰め込み、高校では大学入試に備えて一層の知識蓄積に励むことの反動によるものであろう。様々な論文や各国リーダーから聞いた話によると、iGeoで好成績を残している東欧諸国、シンガポール、オーストラリアやニュージーランドでは、いわゆる暗記学習のウェイトが低い。これらの国々では、総じて「考えて議論する」というスタイルの地理授業が主流で、資料や統計を駆使して社会や地域の発展に寄与できる計画立案が地理の目的になっている。地名・物産の暗記からはほど遠く、中等教育の地理はむしろ大学における地理学に限りなく近い。「生きていくのに地理は不可欠」と考えられ、地理が教科として独立している国も珍しくない（写真4）。

もちろん強豪国の選手たちは、激戦を勝ち抜いた選りすぐりの優秀な強者揃いであるが、彼らは普段通りの思考回路で好成績をマークしているといえる。東欧諸国に至っては「隣国とも言語が違うので英語は幼少



写真4 iGeoタスクフォースのアンコーネン・ヘンク氏（右）と筆者（伊藤敦子氏[早稲田実業学校]撮影）タスクフォースとの会話を通じて各国の地理教育の実情が入手できる。

期から必須」(ポーランドのリーダーによる) というのも国際大会に向いている。要するに地理も英語も日常生活に必要な基盤教科であり、われわれは様々な教科・科目を、国際水準の教育理念であるESD (Education Sustainable Development) やPISA (Programme for International Student Assessment) に近づけていく本気の努力を早急に始めなければならないと実感する。

### たたかい終わって

選手たちはスケジュールの中<sup>なか</sup>日にテストを終えると、その夜の文化交流会で異国の友と工夫して創りあげたパフォーマンスに興じて観客（他の選手やリーダー）を沸かせ、最終日のメダル授与式では異国の友の受賞に大きな拍手を送れるまでに急成長する。こうして夢のような一週間が過ぎる（写真5）と、総勢124名の選手たちはアフターツアーに、そして別のは祖国へと散らばった。

その夢の世界が2013年夏（7月30日～8月5日）、京都を舞台にして繰り広げられる。通常はAP大会の年だが、以後はすべて国際大会となり、多くの国や地域から選手やリーダーを迎える（写真6）。ケルン大会の参加国・地域は32、筆者もその一人である日本の準備委員会は、ぜひともそれ以上の参加国・地域を得たいと願っている。日本国内に関してはケルン大会の予選志願者627名に対し、京都大会では867名が志願しており、国内史上最多を記録している。



写真5 最終日の夕刻、ホーエンツォレルン橋のたもとで台湾選手とともに（筆者撮影）左から奇数番目が台湾選手、偶数番目が日本選手。



写真6 各国リーダー向けにケルン大学で筆者が説明した2013京都大会招待スピーチの資料の表紙（筆者撮影・作成）画像は菊水鉦からみた室町通。京都の位置、気候、伝統文化を画像とともに紹介した。

# 日本で正解でした！

教員研修留学生 ステファン・ランドリアマナンツア  
(マダガスカル共和国出身)



マダガスカル共和国出身のステファン・ランドリアマナンツアと申します。昨年十月に日本に住み始めました。京都教育大学で、一年半の間で教員研修として留学することになりました。日本は私にとって初めての海外ですから、日本に来る前に不安な気持ちがありました。言葉や読書など苦手でしたので、日本に生活するのは困難ではないかと心配していました。ところが、実際に住んでみたら、周りの人たち、大学のスタッフから同じ専攻の日本人の友達とのおしゃべりで留学生活は楽しいだけでなく、豊かになりました。

実はこの一年半の間に、多種多様な経験をしました。観光も含めて、やっと様々な日本人と友達になって、そのおかげで日本人の文化を実際に体験しました。特に日本で一番歴史的に有名な観光地を訪れて、勉強はもちろん、いつでも日本の古いお寺や神社など観光することができました。観光地の中で、一番気に入ったのは金閣寺です。建物自体が非常にすばらしくて周りの池および景観が本当に素敵です。しかも、金で出来ているのが魅力的だと思います。今まで、金閣寺には10回ぐらい行ったことがありますが、京都だけでも全然飽きません。留学中で様々な所を訪問することができ、日本のいいところを味わいながら各々の特徴も勉強が可能でした。

そして、先ほど述べたように日本文化を経験しました。先進国でも、伝統的な習慣や文化などを大事にしている日本人は少なくないと気づきました。祭りや儀式を行う時、とてもきれいな着物と浴衣を着たりします。私も着る機会があって、非常に楽しかった。それ

だけではなく、茶道、折り紙、囲碁、書道の文化に触れ合うことができ、本当にいい経験になりました。実はマダガスカルで、今のように日本文化に触れ合う機会がなかなかなくて、日本でやっとできていい思い出になりました。実際マダガスカルと日本はとても遠く離れていますので、まさか日本で留学ができるとは思ってもありませんでした。ところが、日本にいる一年半の間に日本の文化と接触ができて、本当に恵まれていると思っています。

そして、国が違うともちろん文化が違います。私は日本人の暮らし方、考え方、ルールをきちんと守る様子を見て、勉強しながら理解します。私は暑い国の出身で、暑い国はのんびりする傾向があります。なので、最初は日本人がどうしてそんなに急ぐのかが疑問になり、それに対応するのは難しかったのですが少しずつ慣れてきました。世界で日本はよく頑張る国と言われてはいますが、日本に住み始めてから、それが理解できました。日本は先進国である理由が、日本人にはきちんとルールを守るという習慣があることから納得できました。それが可能ということは、日本人は子どもの頃からそれを身につけるように育てられます。



教育が専攻の私は、留学中に様々な学校を訪問することができ、そして先生方が十分な知識を持って授業を行い、子どもたちが熱心に勉強して、努力する子どもたちを育てられるのは当然と思いました。私は何回か日本の小中高等学校で国の紹介をする機会があり、とてもいい経験になりました。日本で日本人に私の国の紹介をしたことはもちろん、日本人の生徒との交流は忘れられない思い出になりました。皆が真面目に聞いてくれてとても嬉しかった。

昨年の夏休みで、日本風のキャンプを経験しました。留学生と児童生徒との交流プログラムに、参加させていただいて、五日間ぐらい外国人サポートスタッフとして、国の遊び、紹介、文化、習慣など様々なことを子たちに教えることができ、とても楽しく過ごしました。一緒に遊んだり、歌ったり、料理を作ったり、勉強をしたり、子どもたちが頑張る様子を見たりして本当に最高の思い出を作れました。その交流のおかげで、様々なことを知ることができました。キャンプを通して、私は日本の教育を学びました。マダガスカルでは日本の映画とかドラマなど日本の学校がよく出てきますが、先ほど述べたように、実際に日本の学校で交流するとは思ってもいませんでした。それができて、本当によかったと思います。

最後に、勉強はもちろん様々な活動や交流があり、一年半の間の日本の留学生活は本当にあっという間でした。生活は楽しくできて、大学のサポートはもちろんありましたが、毎日の生活で、日本人の友達やクラスメイトに十分に支えてもらえたと感じました。日本で様々なことを学ぶことができ、日本の文化、日本の食べ物、習慣、ライフスタイルを含めた経験ができて、最高の思い出を作れました。留学中に、日本のことをたくさん勉強しました。自分の国と違うことが多くありますが、その中で、日本人はルールを守ることが一番すばらしいと思っています。信号が緑になるまで、車が通らなくても、皆がちゃんと待っています。しかも、時間を守ることはすごいことだと思います。他の国は日本ほど時間を守らないと思います。お店のサービスも世界一だと思います。すべての日本人が誇りを持つべきことのひとつだと思います。私もこれから自分の国に帰った後で、日本で習ったすべてのことをマダガスカルで実現したいと思っています。マダガスカルも皆が規則をきちんと守り、頑張れば、日本のように先進国にきつとなるだろう。私は留学するために日本を選んで正解でした。留学生活は本当におかげさまで豊かになりました。観光がたくさんでただけでなく、日本人と触れ合っ、様々な勉強ができました。本当に世界で最も安全で、立派な国で住めてよかったと思います。日本にとっても感謝です！



# トップクォークからヒッグスへ

理学科准教授 高 嶋 隆 一

## はじめに

2012年は素粒子物理学に取って特別な年になったと言えます。物理学は古い学問分野で新発見のネタは尽きそうな物ですが、なかなかしびとくやっていると云えるでしょう。ここで、私がこの原稿を書くことになったアトラス実験や素粒子物理学について少し説明させていただきます。



コントロールルームで衝突イベント表示にわく、研究者たち（2011年）

## ヒッグスとはなにか

話題になっているのはよくわからないヒッグスという粒子です。なんでそんなにがんばって、研究するのでしょうか。

最近では煮炊きに直接火を使わなくてもよくなっているので、「燃える」という現象を直接目で見る機会が少なくなりました。物理学では「燃える」という現象は原子の結合状態が変化して、より強く結合することです。酸素分子と炭素の強い結合の結果で熱が出てくることになります。結合した物を引き離すには仕事が必要というのが力学の教える所です。

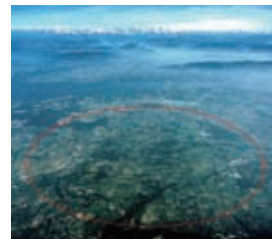
特に太陽が「燃える」ことを説明することが物理学の最大の課題だったと言えます。酸素分子と炭素の結合で熱が出るときは電気的な力が作用して、結合の組み替えが起こり熱を出します。電気的な力は基本粒子がぶつかるときにその過程を光子の交換によって説明するので、媒介粒子は光子です。

太陽が「燃える」とき陽子が中性子に変化することが必要なので、弱い相互作用の媒介粒子であるW粒子を交換する衝突が起こります。しかもその衝突というのが説明しにくい衝突で、陽子と陽子が衝突した時、重陽子と陽電子とニュートリノができるというものです。このW粒子の質量が陽子の約85倍もあり、反応が起きる断面積がこの重さのために小さくなります。このようなW粒子を含んで場の理論がおかしなことにならないような理論を作ろうとすると、光子と同じ質量のない仲間とするべきであるという所に問題の始まりがあります。始めに重さがない粒子に質量を

付加する理論がヒッグス機構と呼ばれるものなのです。その理論が予言するのがヒッグス粒子です。W粒子自体は私がこの大学に就職した1983年に理論の予言した質量のとおりCERNにおいて発見されました。これほど質量の大きな粒子を媒介にして反応が起こるので、太陽は燃えにくい訳です。100億年もかかってゆっくり「燃えて」いるのです。このように、太陽の「燃える」仕組みを首尾一貫して説明するにはどうしてもヒッグス粒子が必要です。この世界を根本から理解することが最も面白いことだとすると、これほど興味深い対象はありません。

## 素粒子物理学とは

素粒子物理学は「この世界を理解する究極の理論」を意識しながら行う実験的な探求活動です。突飛なことを言うようですがその実態は、お葬式のような宗教行事に出席してお話を聞くのに似ていると思います。まずその専門書を読もうとしてもそれは簡単ではありません。専門書は膨大な実験的な事実を短くまとめた物なので、その背景を考察しながら少しずつみ砕いて理解を進めないと全くわかりません。お経の後に講話を聞いてやっと少しは教えの片鱗がつかめるような気がする程度なのに似ています。大学院に入学する前後は講義を聴いてもほとんど理解できず、わからないからもっとやってみたいという感じでした。もともと、富山の農家の自給自足的な江戸時代並みの生活環境から都会の京都に出てきたこと自体がカルチャーショックだったわけですが、実験物理という高度の文明によってもたらされた先端機器を操作していくという分野にまさか入り込んでいくとは予想もしていませんでした。大学に入った頃は、大型計算機の実習というのにも、紙と鉛筆以外の世界が恐ろしく、参加をしなかったことが懐かしく思い出されます。



モンブラン、レマン湖を背景としたLHCの全景

## 計算機とネットワークの発展

素粒子物理学は計算機資源を大規模に使う点では、1980年代もそうでしたが様子がだいぶ違っていま

した。大型計算機にカード穿孔機でプログラムを入力してデータ解析をする所も経験しています。データを取る計算機のメモリーが100kバイト程度なので今の計算機の数万分の一でした。しかも単機能のICを手作業で接続した物なので、よく故障していました。80年代も半ばになると様子がだいぶ違ってきました。AppleがGraphic User Interfaceを備えたパソコンを市場に投入したのです。1987a 超新星爆発の年に我が娘が生まれた訳ですが、その頃初代Macをシカゴ大で買って担いで帰ってきたところ、はいはいぐらいしかできない娘が、フロッピー OSのインストール作業かなにかを見ていて、財布のクレジットカードをフロッピー装置に突っ込んだのを思い出します。その頃はアップルトークというものを使い始めていましたが、1990年代のはじめ頃からイーサネットの方がよく使われるようになっていきました。最初は電子メールや、ソフトウェアのやり取りに使われていましたが1990年代の半ば頃にはWebが普及し始めました。この頃には高価なワークステーションにかわってPCがよく使われるようになりまし。また高エネルギー物理学のネットワークを利用した環境も整備していきました。クリントン政権になってテキサスでの加速器計画が終わってしまったので、シカゴの郊外のフェルミ研究所の稼働中の衝突型の実験施設で実験するようになったのもこの頃です。この頃初めて、FPGAと呼ばれる電子機器を使うようになりました。これは高機能な電子機器でCPUさえも後から書き込んだり、別の機能を持った電子装置に変身させたりできる物です。素粒子物理学は現代科学の最先端に位置する学問なので技術の最先端を行く物を利用していくことになっています。そういうわけで、結構面白い訳です。



トロイド電磁石とパレルカロリメーター

### トップクォークからヒッグス粒子へ

フェルミ研究所では日本の大学連合として筑波大学を中心に研究活動が行われていました。特に1995年にトップクォークが発見されましたが、その最後の頃の実験シフトはとったものの発見論文にはタッチの差で名前が載りませんでした。しかし衝突点や粒子の崩壊点を検出する測定器の開発テストは2度にわたって高エネ研（高エネルギー加速器研究機構）で行われ

たので、日米の研究者と楽しく開発作業ができました。トップクォーク自身は小林・益川理論で予言されていた粒子でもあり、物質粒子としては最後の粒子の発見でもあった訳ですが、これがヒッグスの発見と関係していることは最近になって知りました。

テキサスの加速器計画に参加していた人たちで再度、大型陽子衝突加速器（LHC）計画に参加することになったのは1994年のことです。当時は欧州合同加速器研究機関（CERN）では重心系エネルギー209GeVの電子・陽電子衝突型加速器（LEP）が稼働中でした。ヒッグス粒子は重い粒子に結合して生成するので90GeVのZ粒子に結合して生成するとしたら215GeVの衝突で生成できます。ヒッグス粒子はもっと重いかもしれないので、後少しエネルギーを増強することをあきらめて、地下100mのトンネル内から電子・陽電子衝突型加速器を撤去しLHCが完成したのは2008年のことです。完成後の試運転でトラブルが有り、予定の重心系エネルギーを半分の7TeVに下げて、本格稼働を開始したのは2010年になりました。

陽子と陽子を衝突させる加速器ではグルーオンやクォークの衝突で粒子生成がおきます。これらは陽子の部分的なエネルギーを持ってぶつかるので、実験的には重心系エネルギーを決められませんが、質量のわからないヒッグスの探索には適しています。生成過程で有望なのはグルーオンとグルーオンの融合時にトップクォークがぐるっと回る過程でヒッグスができるというものです。2010年に始まる3年間の実験でようやくヒッグスらしき粒子が見つかったのもトップクォークが有ったおかげだと思つと、全く幸運でした。3000名あまりの人々との共著論文ではあっても人類の歴史に残る発見に名を連ねることができましたが、これも本学の皆様方の支援の賜物であると感謝しています。20年近い歳月と膨大な人的、物的資源を投入した人類史的な事業に参加できたことは幸運でした。また本学は大学として機関参加していますのでたくさんの学生諸君がこの事業に参加でき、多くのことを学んでくれたと思っています。またこの事業の意味を広める活動としてレゴによる実験模型の組み立てを楽しんでいます。





# 附属高等学校へのオマージュ ～三年+二十六年を振り返って～

京都教育大学附属高等学校副校長 齊藤 正治

附属高等学校（以下本校）に直接お世話になったのは、生徒としての3年間で、縁あって教師として在籍した26年間の合計29年間になります。これまでの人生のおよそ半分になるのですから、随分長い間本校は私を見守ってくれたことになります。今回定年退職にあたり執筆の機会を与えていただきましたので、二つの期間に分けて、それぞれ思いつくままに振り返ってみたいと思います。

## 〔附属高等学校の生徒時代〕

紅顔の美少年(?)として入学したころの本校は、設置後間もないということもあり、メディアセンターや武道場は言うに及ばず体育館すらない状態でした。もう少し先輩のころは、校舎についても、ホームルーム教室が配置されるべき本館棟が1年間未着工で、特別教室棟しかなかったということでしたから、これでもまだましな状態だったのでしょうか。そのような状況でしたから、体育の授業は雨が降っても屋外で行いました。泥んことびしょ濡れになってサッカーの授業に興じたことを思い出します。また、後に体育館が建設されることになる、その予定地の前方にあったコンクリート敷きのテニスコート兼バスケットコートのような場所で授業を受けたり、休み時間に遊んだりしたこともありました。



体育の授業

また、本校の敷地は、旧日本陸軍第16師団の輜重隊跡地だということで、当時の兵舎を利用していました。文房具や書籍を販売していた購買部の建物、女子のロッカールームなどが記憶にあります。購買部では、河原町にあった「オーム社」（残念ながら今はありません）が書籍（おもに文庫本や新書、問題集など）販売を担っておられたと思います。これらの建物は今はなく、メディアセンターや自転車置き場にその

場所を譲っています。



兵舎を移設転用した女子ロッカールーム

それでも、特別教室棟は保護者のご寄付をもとに建設されたということであり、当時の高等学校の校舎としては極めて先進的な発想が活かされ、天文台が屋上に設置してあったり、LL教室が完備されていたり、さらには理科各実験教室も最新の設備が整えられており、今から思えば諸先輩保護者各位の並々ならぬ熱意と期待が反映されていました。



天文台



理科実験室

入学してすぐに、「特訓」と称するオリエンテーションを兼ねた合宿がありました。吉野方面に出かけたのだと記憶していますが、少し大人に近づいたのだという自覚を身につけ、それぞれが自律して互いを認め合うきっかけになればと設定されたのでしょうか。友達になりたてにも拘わらず、自由時間には真剣に青臭い議論もしたように覚えています。

入学して驚いたのは、既に中学時代に微分・積分を独学で学んでいたというクラスメイトがいたことでした。その他にも、文学であったり哲学であったり、何かに真剣に取り組み、私が触れたことも聞いたこともないような経験や知識を身につけた友人がたくさんいました。やはりすごい学校に入れたのだと素直に感

激しました。

当時の学級定員は50名でしたので、クラスも大変賑やかでいろいろなことに活発に取り組んでいました。私自身3年生では、体育委員を務めながら文化祭実行委員も兼ねるという無謀なこともしました。

体育祭の騎馬戦は、今も変わらぬ3学年縦割りのクラス別（色別と称しています）対抗戦であり、1、2年生も含めて事前に打ち合わせをして組織的に戦った結果、我がクラス（色）はリーグ戦を制しました。体育祭全体の総合優勝もすることができ、閉会式で賞状を授与され、そのうえクラスメイト全員から胴上げをされたことは青春の晴れがましい思い出として残っています。

文化祭は、烏丸丸太町にある勤労会館（現ハートピア京都）にて、これも色別で演劇を行いました。3年生はスタッフということで、夏休みの後半から10月の本番まで1、2年生のキャストといっしょに取り組むことになりました。中国の戦国時代に題材をとった本格的な演劇でしたが、衣装製作も大変で多くの仲間が協力してくれました。1、2年生キャストの面々の当日までの努力と本番での迫真の演技は頼もしい限りでした。

授業は密度濃く充実したものでした。当時他の高等学校では、1年間ではその科目の教科書がなかなか終わらないというのを耳にしていたのですが、本校では確実に教科書を終えていたように思います。個性的で実力派揃いの先生方でありました。公立高校から優秀な先生方が名乗りを上げて参集されたのだという話でしたし、初代学校長の四方實一先生も大層尽力されたのだと思います。今はお亡くなりになった方も大勢おられますが、授業や学校行事でのさまざまな会話や場面をふとした折に思い出します。まさに恩師と呼ぶべき先生方でした。

3年生のときには、東京の市ヶ谷で三島由紀夫の割腹自害事件がありました。本校にいたわれわれ生徒にも、どこからともなくそのことは伝わってきました。午後の授業は物理でしたが、担当のS先生は、教室に設置してあったテレビで、その報道番組をひとしきり見ることを許してくださいました。驚きと興奮でみな声もなく画面を注視していました。

これも3年生のことですが、教育実習生による例外的な授業がありました。実習期間の終わりのころ、男子体育授業担当の教育実習生とわれわれ生徒とは、それなりに兄弟のような気安さで親しくなっていました。そのような状況での実習生からの提案だったのでしょうか、そこに至る経緯については全く忘れてしまっていますが、男子生徒全員で隊列を組み校外へ出て墨染近辺を走ったことがあります。現在の交通事情

では考えられないことですが、教育実習生も全員がわれわれの周りを取り囲むようにいっしょに走ってくれました。リズムをとるために大きな声を順番に掛けながら走り回りました。地域の方々はさぞ驚かれたことだと思いますが、その様子についての記憶はありません。ただ、途中から激しい雨が降ってきても全く意に介することなく、逆にファイトを燃やして走り通したのを覚えています。それぞれが、迫り来る大学受験に向けて、期せず巧まず立ち向かおうとする気概を示し、実習生がわれわれを励ますべくその機会を与えてくれたのかもしれない。

そして、いよいよ卒業のときがやってきました。卒業式は、現在の体育館で行われました。日付も現在と同じ3月1日。式の状況はすっかり忘れてしまいましたが、二日後に迫っていた国公立大学入試（当時の1期校）に向けて相当気合いが入っていたことは確かでしょう。退場に際して、クラスごとに一列になって歩みを進めたのですが、私のひとつ前を行く友人（例の中学時代から微分・積分を独学していた彼）の後ろ姿を何となく目にとめながら、「これでもうみんなとともに過ごすことはないのだろうな」と感慨とも寂寥ともつかぬ感情が込みあげてきました。

#### 〔附属高等学校の教師時代〕

大学卒業後、3年間製鉄会社の技術系社員として過ごした後に、京都府立東宇治高等学校で9年間物理の教師を務めました。そして、本校へ化学の教師として赴任しました。高校3年生のときに担任していただいた井津定光先生の後任ということでした。東宇治高校時代から理化学協会の役員を務めていたこともあり、井津先生との繋がりの深さを改めて思いました。校長先生は本学国文学科の野々村勝英先生、副校長先生は数学の長澤直孝先生でした。長澤先生には在学中にご指導いただきました。専門替えのこともあり不安を感じていましたが、理科や他の教科にも在学時の恩師が数多くおられたので温かく迎えていただきました。

久しぶりに見る母校でしたが、在校時にはほんの苗のような存在であったメタセコイアが、校舎に沿って鬱蒼と茂っているのが印象的でした。



赴任したころの本館棟とメタセコイア

現在、メタセコイアはさらに育ち、4階建て本館よりも高く聳えています。



数年前の晩秋の本館棟 右奥で紅葉しているのがメタセコイア  
左前はポプラ並木

10年以上停止していた一般中学からの生徒募集を、3年ほど前から再開したとのことで、今日に至る変革の兆しを見せ始めたころだったのかもしれませんが。しかし、私の卒業後、全国的にも頻発していた高校紛争が本校でも生じた影響がまだ残っていたのか、多くのことを考えていかねばならない状況だったと思います。当時を経験された恩師の先生方のご苦勞はいかばかりであったかと察するに余りあります。

赴任後の3年間は生徒指導部に配属され、生徒自治会の担当となりました。本校をあげて、学校行事である体育祭や文化祭、さらには研修旅行、一泊研修などについて、その目的、内容や指導方針が見直されていきました。日常の清掃活動などもその対象になりました。生徒自治会のメンバーも大いに積極的に取り組んでくれました。生徒指導のあり方についても、個別性を考え極めて手厚く指導するとともに明瞭な整合性を求めていく方向へ転換されていきました。

教科指導では、とにかく理科は実験を重視して授業を組み立てろということで、夏休みなどでは暇を見つけては授業用の実験開発に勤めました。化学には、前任校で野球部顧問をしていた関係で存じ上げていた石塚信夫先生、物理には高田雅之先生、生物（地学）には大河原玄沖、榎本力両先生がおられました。いずれも大変な大先輩で緊張しながら過ごしていましたが、それぞれ温かく接していただきました。特に、石塚先生には個人研究においてもご指導いただき、校内の研究紀要や附属教育実践総合センター（現教育支援センター）紀要には毎年のように投稿したのを覚えています。最近、本校の研究紀要のすべての論文について、校内限りではありますがデータベース化され、今後の研究の参考文献として活用されやすくなったことは嬉しい限りです。また、3年生を中心とした長期休暇中の進学補習が制度化されてきたのもこのころで

した。夏休みでいえば、前半は英数国、後半が理社という大まかな割り振りであったと思います。

全国国立大学附属学校連盟高等学校部会の研究大会を本校で開催したのもこのころでした。20年ぶりの開催当番校であり、分からないことも多くあったので綿密に計画が練られました。全員に仕事が割り振られ、先輩の先生方に教わるままに取り組みました。当日昼の休憩時間には、現在もある駐車場傍の藤棚を利用して茶道部がお点前を披露したのを覚えています。

4年目には1年生の担任を務めました。現在もそうですが、生徒は大変仲が良く互いのことをよく思いやっていました。学力的に不安な者がいれば、定期試験が近付くと、放課後の教室で教え合いをしたりすることもありました。そのかいもあって、1学期中間試験で数学のクラス平均点は学年最下位でしたが、学年末試験では見事トップに輝くという立派な結果を残しました。3学期のクラス対抗球技大会でも、事前に計画を立てよく練習したので、多くの種目で優勝を果たしました。ショートホームルーム（SHR）で、各優勝チームが前に出て、はにかみながら感想を述べていたのを思い出します。自らの力でしっかり育った附属高校生の素晴らしさを改めて感じました。

教育実習も大変楽しくやりがいのあるものでした。当時、教育実習は4回生での4週間のみで、教科ごとにA、Bいずれかの班に配属されていました。実習生の予備実験がうまくゆかず、深夜に及ぶ研究授業準備とその指導は今も懐かしい限りです。理科はどの教科も同じような状態で、理科各教室の電燈が煌々と灯り中庭を照らしていました。お隣の男子寮にいる実習生などには、指導教員も帰りの電車がなくなって寮と一緒に泊まり、翌朝そこから出勤したというような話も聞きました。そのような状況でしたから、教育実習終了後の「謝恩会」と称する実習生と理科教官との懇親会は、大変和やかなものとなり、教員採用試験などの相談にのったりもしました。このようなことは、もういろいろな意味で、今日では考えられないことだと思われま

す。その後、生徒指導部長を3年、教務部長を3年、研究部長を2年務めました。生徒指導部時代には、文化祭の日程調整等を生徒自治会ではなく生徒指導部主導で行うことが定まり、年間行事計画上でのバランスが極めてよくなりました。その中で、生徒自治会や生徒は文化祭の内容をより充実させることに力を注ぎ、教職員はそのために助力を惜しまず指導に励んでいます。

また、このころ本校の念願であったメディアセンターが竣工しました。



メディアセンター

多目的ホール、図書室、パソコン教室、LL 教室（現在はCALLシステム導入）等が新設され、それに伴って旧図書室は男女生徒用ロッカールーム（シャワールーム付き）に改装されました。このため、これまで女子ロッカールーム、書道教室や旧食堂として使用していた旧兵舎は取り壊されました。加えて、数学教官室がメディアセンター内に移り、跡部屋は進路指導室、LL 教室の跡地には生徒指導部室と書道教室が移りました。さらに、それまで使用していた渡り廊下2階にあった生徒指導部室および生徒会室は、中会議室と小会議室になり、進路指導室が生徒会室となりました。加えて、渡り廊下1階には購買部が設けられ、旧宿直室は和室（茶道部が活動）となって前方には立派な露地ができました。



和室（茶室）



露地

教務部時代は、いよいよ学校を広報するご時勢に入っていました。従来の学校要覧とは異なるビジュアルでカラフルな学校紹介冊子を作り、学校を大いにアピールすることとなりました。タイミング的に新指導要領施行に伴うカリキュラム改定も行い、慌ただしい毎日を過ごしました。

それから、本校にとっては画期的なことがありました。研究部（当時は学事情報研究部）が開発していた学事情報システムが完成し本格始動したのです。これによって、生徒の教育に関わる情報は一元管理されることになり、多くの帳票を出力することが可能になるとともに、省力化に多大の貢献を果たしました。

教務部室の改修も行われ、進路指導室に分離配置されていた進路係も教務部室に合同することになりました。そのころ、職務を縦割りで行っていたのが、職務を横断して担当することの弊害が顕著になってきており、幅広く仕事に通じることが教師としての力量アップにつながると考えられましたので、本来の教務部各係への配当とは別に季節ごとの繁

忙期を考慮して人員を遊撃的に再配当することとしました。さらに、進学補習もより組織化することが必要になりつつあり、夏休みにはエアコンのある教室が不足したため、環境教育実践センターの講義室等をお借りしたこともありました。

研究部時代には、高大連携が大きなテーマになりつつありました。本学の先生方に本校の生徒を対象にした特別講師制度へ登録いただき、専門性を生かした講義をしていただきました。また、国立大学附属学校の特徴である教育研究にも力を入れ、本学附属教育実践総合センター（現教育支援センター）主催、本校主管の教育研究集会も定着してきました。さらに、本校が開発した学事情報システムを一般公開し、その普及のため夏休みに講習会・研究会を継続して開催しました。研究部は新設後間もない分掌でもありましたから、部内の懇親にも力を注ぎ分掌旅行に出かけたのも懐かしい思い出です。

育友会のご理解とご支援も今まで以上に必要になってきました。本学附属学校園育友会連合会の合同体育大会（略して合体）やボーリング大会、文化行事など各種行事にも積極的に参加し、懇親を深めるとともにときには意見交換もしてご理解を深めていただくよう努めました。



本年の合同体育大会での高校チーム

そして、副校長を14年間勤めました。木代喜司先生、武蔵野實先生、安東茂樹先生、細川友秀先生、山下宏文先生の5名の校長先生にお世話になりました。世の中が変わってきたので生徒・保護者が変わったのか、生徒・保護者が変わってきたので世の中が変わったのか、歴代の校長先生には従来に増して直接的に学校運営に携わりご尽力賜りました。厳しい状況下での的確なご判断、教育研究へのリーダーシップがあったればこそと心より感謝致しております。

副校長としての職務は、それまでと違って対外的なウエイトの方が重くなりますが、ここでは本校内でのことに限って述べたいと思います。

最初に必要になってきたのが組織改革でした。現状に合致する組織のあり方が求められ、任命主任制も踏まえて運営委員会を改組するとともにその権限が強化



されていきました。

次に、本校の長年の課題であった文部科学省の研究開発学校にも挑戦し、スーパーサイエンスハイスクール（SSH）に全国で最初に指定されることになりました。現在3期連続指定の途上で、通算11年目という息の長い研究開発活動を継続中であります。この活動は、本学のご指導とご支援のもと、研究部、理科、数学科をはじめとする各教科等、全校をあげての総合的・有機的な連携によって実践されています。その結果、カリキュラム開発における学校設定科目の設置、日英サイエンスワークショップ（日英SW）、筑波SW、ハワイ島研修、舞鶴での臨海実習、スーパーカミオカンデ研修、スーパーサイエンスクラブ（SSC）、スーパーサイエンスネットワーク（SSN）等多くのコンテンツが開発されました。ご指導ご支援いただきました本学の諸先生方に心より感謝申し上げます。



日英SWでの  
両国高校生の集合写真



ハワイ島研修  
マウナケア山頂で天文台群を望む

さらに、SSH活動の一環として、ロボカップジュニア（サッカーの部）世界大会に、電子工学部の生徒が3年連続出場し、世界3位、2位、3位の成績を収めました。その活躍が認められ、彼らは本年度京都創造者大賞・未来への飛翔部門を受賞しました。これらの成果は、彼らが自主的に熱意をもって本学のご専門の先生方にアプローチし、それに応えるべく土日返上しての懇切なご指導を賜った結果得られたものでした。ご指導ご支援いただいた先生方に重ねて感謝申し上げます。SSHの諸活動は、私が在学生のころには想像もできないことであり、隔世の感があります。



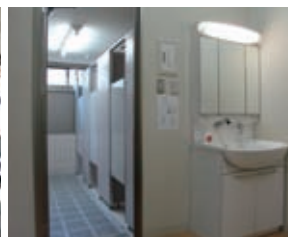
ロボカップで奮戦する本校の「サッカーをするロボット」

在任中の後半には、施設設備の安全性確保と現代化という課題が持ち上がってきました。文部科学省、本学と保護者のご支援のもと、普通教室へのエアコン設

置に始まり、特別教室棟各部屋へのガス方式のエアコン設置、本館棟および渡り廊下の耐震改修工事、普通教室へのプロジェクター、PC等設置による教室機能の現代化、自転車置き場の新設、体育館への渡り廊下の屋根設置、トレーニングルームの新設、テニスコートの整備、武道場の耐震改修、特別教室棟の耐震改修等、そして本年度末に始まる体育館の全面改修工事と次々に実現してゆきました。誠にありがたく厚く御礼申し上げます。



現代化されたHR教室  
プロジェクターやPC等が  
あるなかで床はフローリング調



ロッカー室内の  
シャワールーム



屋内と屋外に分かれて  
いるトレーニングルーム



二足制の要になる  
渡り廊下の昇降口

また、本年度に第1学年の担任室が渡り廊下2階に新設され、同じく生徒の早朝登校による「朝学習」も始まりました。既に、進学補習も全学年・全長期休暇中に実施されています。道徳教育の充実も取り組まねばならない今日的課題です。「お湯を温めるには、それよりも熱いお湯をもってしなければならない」のたとえ通り、私を含めた教師の側にまず相応の矜持が必要となってくるでしょう。そして、互いの中に謙虚さを打ち立て、惻隱の情を築くことがなによりも大切だと思っておりますがいかがでしょうか。

本校は、これまで「自主・自律」を掲げて何事にも取り組んできました。その歴史のひとつに、縁あってお世話になり、幸せにも志ある方々といっしょに仕事をさせていただきました。附属高等学校が、本学のご指導ご支援の下、他の附属学校園と手を携えながら、自らさらなる変貌を遂げつつも、時代時代に「自主・自律」のなんたるかを示し続けてほしいと願っています。

\*写真は、本校二十周年記念誌、三十周年記念誌、現在の学校紹介冊子等から引用しました。

## 野鳥を楽しむ

理学科教授 坂東忠司

藤森キャンパス内にはたくさんの野鳥が訪れます。ここ数年間に確認された種数は、およそ40種にも及びます（落ちていた死骸や羽、鳴き声などから同定した結果を含む）。市街地に多いハシブトガラス、ムクドリ、スズメなどはもちろん、水辺で見られるアオサギ、ゴイサギ、カルガモ、そして食物連鎖の頂点に君臨するオオタカやフクロウ、さらにはめずらしいオオルリやアオバト、アオゲラなど、実に多様な野鳥たちがこのキャンパスを生活の場として利用しています。ほんの少し意識を集中して観察するだけで、いろいろと面白いことに気づくはずですよ。



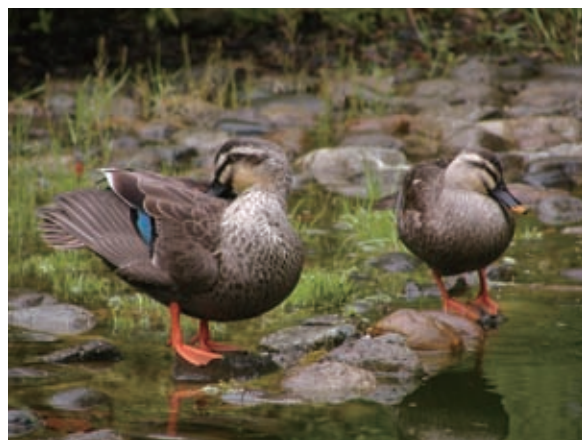
○棟東側の池の近くに現れたオオタカ（幼鳥）



A棟南側の空き地に水を飲みに来たアオバト



エンジュの木からこちらを伺うオオルリ



○棟東側の池を訪れ、のんびりとくつろぐカルガモ夫婦

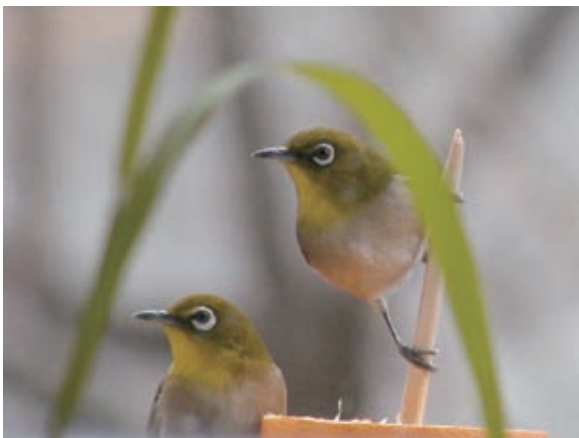
まず、ヒヨドリです。近くのセンダンの木にやってきたヒヨドリを部屋の明かりを消して窓のブラインド越しに眺めていました。ところが、ブラインドの間隙越しに目が合った途端、「ピーッ、ピーッ！」と、けたたましい悲鳴をあげながら逃げてしまいました。鳥の種類にも依りますが、多くの野鳥は、人が何かをしながら見ている限り、さほど警戒心を持たないようです。しかし、立ち止まったり、カメラを向けたりした途端に飛び立ちます。人の微妙な動きや気配を察知する優れた能力を備えているのです。

また、多くの野鳥は空や景色の映った窓ガラスは苦手なようです。「ヤッホーッ！青空やーっ！」と快適な飛行も「ゴツン！」と当たれば十中八九は命を落とします。窓の下でうずくまっていた元気がないメジロを京都市野生鳥獣救護センターに二度ほど運んだことがあります。いずれも助かりませんでした。学校など大きな窓の多い建物では、窓ガラスに目印のシールを貼るなどの対策が必要です。本学では、メジロの他にもカワラヒワ、トラツグミ、ホトトギスなどが被害に遭い、実験室の冷凍庫の中で眠っています。

つぎに、小鳥を身近に呼び寄せる方法をご紹介します。窓の外に木の枝や餌台を置ける少しの場所さえあれば可能です。数年前まで、私は毎年冬になると窓の外にミカンの輪切りやヒマワリの種などを置いていました。餌に気づいて警戒心がなくなるまでに1-2週間かかりますが、やがてメジロ、ヒヨドリ、カワラヒワ、ヤマガラ、スズメ、シジュウカラ、ドバトなどが訪れるようになります。窓ガラスを閉めてブラインドを下ろしておけば、30-50 cmの至近距離から野鳥を観察することさえできるのです。



教材用の羽標本として復活したカワラヒワ（標本制作：日本野鳥の会京都支部 植田光弘氏）



割り箸に刺した輪切りのミカンを食べに来たメジロの夫婦

また、殻の両端に穴をあけた殻付きピーナッツに針金を通し、リースのように木の枝に下げておくとシジュウカラがやって来ます。器用に殻からピーナッツを取り出しては近くの枝まで運び、両足で抑えながらくちばしで小さく砕いて食べます。焼き肉で余った脂



ピーナッツのリースにやって来たシジュウカラ

の塊などをネットに入れて吊るしておくのも効果的です。黒いネクタイ姿のシジュウカラのかわいい仕草は、きっと心の疲れを癒してくれるはずですよ。

このような観察は窓越しやブラインド越しに行ないませんが、図太いドバトは窓が開いていても平気でやって来ます。あるとき、居座って場所を譲らないドバトにしびれを切らしたヒヨドリが、繰り返し繰り返しドバトを威嚇する光景を目にしました。十メートルほど離れた木の枝で小刻みに羽を震わせ、いら立ちをあらわにしているかと思えば、一直線にドバトめがけて飛んで来ます。当たる寸前で身を翻し再び元の木の枝に戻ります。攻撃はドバトが退散するまで続きました。まるで鳥たちの心の声が聞こえてくるようで、こちらまで手に汗を握る興奮したひと時でした。



ヒヨドリとドバトのバトル

朝や昼休みの5分間でもいいのです。ちょっとだけ足を止めて耳を澄まし、野鳥たちのさまざまなドラマに遭遇してみませんか？

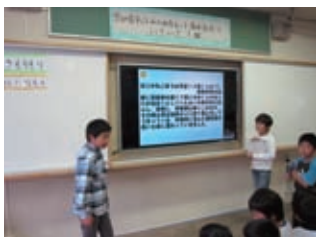
## 新教科「メディア・コミュニケーション科」

京都教育大学附属桃山小学校副校長 西井 薫

京都教育大学附属桃山小学校は、平成23年度から3年間、文部科学省の研究開発学校指定を受け、新教科「メディア・コミュニケーション科」の創設に取り組んでいます。



昨年度同時期の「附属学校園だより」には、本校が平成22・23年度パナソニック教育財団の特別研究指定を受け、「教育実践研究発表会」を開催することを掲載しました。全教室に電子黒板を設置し、新しい環境になったことをきっかけに、パナソニックの研究では、本校が大切にしてきた教育理念を生かし、その上で機器を使うことが当たり前になるようにという願いで、「人間力」育成のためのカリキュラム開発というテーマのもと「未来の文化を担う人の育成～自立と共生の力をもった子どもの育成のための伝え合う力の充実～」という研究課題に取り組みました。全教職員が一致団結協力し、努力を重ね研究を進めた結果、教職員も子どもたちも抵抗なく機器を活用することがで



きるようになりました。そして、機器は日常の一部で自然に使いこなせるものになってきました。この成果を深化・発展させていく必要性を感じ、文部科学省研究開発指定を受け、新教科「メディア・コミュニケーション科」創設を目指していくことになりました。

本校ではこれまで、子どもの自由な発想を大切に、「子どもの側から教育を考える」という教育理念のもとで全ての研究を進めてきています。この教育理念は、新教科「メディア・コミュニケーション科」にも共通するものです。

私たちは、大人も子どもも、溢れる情報と日々進化していく様々な機器の中で生活しています。この新教科「メディア・コミュニケーション科」は、簡単にインターネットから情報を引き出せたり、機器を器用に操ることができる子どもを育てるための教科ではありません。機器は、あくまでも一つのコミュニケーションツールとして位置づけています。機器の使い方がわからないから使わないのではなく、いろいろなことを知り理解した上でたくさんある選択肢の中から、一番適切な方法を選ぶために知っておく必要があると考えました。一番大切にしたいことは、顔を合わせて話すことや相手意識を常に持って人と関わることです。あえて「コミュニケーション」という言葉を教科名の中に入れたのは、相手のことを考え、意識することの大切さを強調したかったからです。



平成25年2月8日には、「相手を意識して行う情報活用能力に育成～メディアを選択・活用し、考えを深めあう子を育てるために～」というテーマのもと、全クラス公開で「教育実践研究発表会」を開催します。



# 学びの主体性を育む連携教育 ～幼小中の交流を通して～

京都教育大学附属桃山中学校副校長 高木 英 男

附属桃山地区学校園のおこなう幼小中連携研究は、3つの学校園が協力しておこなう交流授業や大学の協力を得ておこなう連携授業に、その研究の基盤を置きます。言い換えれば、本校園の研究基盤は、園児・児童・生徒が共に学ぶ交流授業にあり、授業実践をもと

にした大学教員との連携授業にあります。これらの交流・連携授業を通して、私たちは「自立と共生の力をもった子ども」を育てたいと考えます。附属桃山地区学校園幼小中連携研究の今を紹介します。

小学3年生は、中学1年生の指導のもと、災害時の避難マップづくりをおこないました。地形図に示された地点から学校まで、安全に帰れる道を探りました。「川を渡るには?」「踏切は通れるの?」「信号のない国道を渡るには?」、障害を避けながら、学校までの安全な通路を住宅地図に書き込みました。地図の読み方を学習してきた小学3年生は、中学1年生の助けを借りて、見事避難マップをつくりました。マップは、地震時と洪水時について、行動の注意点を加えて、仕上げました。



このような異年齢交流では、年上の子どもは年下の子どもとの交流を通して、自分の学びを確かなものにし、年下の子どもは年上の子どもとの交流を通して、憧れをいただき、育ちゆく自分のモデルを見つけます。

小学校のランチルームでは、毎年2月末頃に、幼稚園年長児と小学1年生と一緒に給食を食べる「給食交流」がおこなわれます。栄養教諭は、年長児が好きそうなもの、アレルギーをもった子どもにも食べられるものを念頭に、給食メニューを作ります。年長児は、小学生当番の白いエプロン姿や配膳する姿、日直の「いただきます」の言葉に興味津々。緊張気味の年長児も、食べ始めると「おいしい」「おかわりしたい」と、笑顔で話していました。そして、1年生の「カップケーキの時もあるよ」「冷凍ミカンもあるよ」の言葉に、一層給食を楽しみに思う年長児でした。



このように、幼小の接続期にあたる年長児においては、小学校での遊び交流・給食交流が、小学入学時における不安を軽減し、小学校での生活リズムやルール順守へのスムーズな適応につなげています。また、小学1年生においては、園児との交流で人との関わりの幅を広げます。

教師交流・大学連携のうち、大学連携は、大学教員の協力を得るといふ附属ならではの利点を活かし「本物」と触れる豊かな学びを実現する(授業)交流を作り出しています。

以上のような交流授業・連携授業を実践しながら、平成23・24年度は「学びの主体性を育む連携教育」という主題のもと、学習者間において学習を進めるための「提案力」を、具体的な「主体性」と捉えて、研究を進めてきました。実践を通しての研究成果は、本研究紀要を参照いただきたいと思います。どのワーキンググループにおいても、自分の学びを人に伝え、人の学びを理解するとき、その年齢差が大きければ大きいほど、園児・児童・生徒はいろいろな工夫を凝らして、伝え合いをおこなうと報告しています。

交流授業、連携授業の取り組みは、少しずつではありますが、自立と共生の力をもった子どもの育成につ

ながっています。今後は、年齢差(相互関係)によって生じるストレス(壁)の解消を考慮に入れる必要があります。ストレス解消のためには「自己肯定感」「自尊感情」「自己有用感」を高める取り組みが必要です。つまり、学習を進めるための「提案力」の育成には、提案力をのばす学習活動とともに、側面からの「自己肯定感」「自尊感情」「自己有用感」を高める取り組みも必要と考えます。



以上のような取り組みをおこないながら、私たち附属桃山地区学校園の教職員は、今後も連続した12年の中で園児・児童・生徒の育ちを見守っていきます。

## “イチョウ” と共にある幼稚園の生活 秋～冬編

京都教育大学附属幼稚園副園長 齋藤 真由美

本園のシンボルツリーである“イチョウ”と共にある幼稚園の生活ですが、ギンナンがたくさん実った今年の“秋～冬”の生活を紹介します。

**<9月>** いちょうのこかげで わになって みんなでおはなし たのしいな あかるくそだて ふぞくのこゝと、園歌でも歌っている“夏”が終わった頃、黄緑色のギンナンが実り始めます。はじめて見る子どもたちは「サクランボ?」「ブドウ?」と、見上げます。

**<10月>** 子ども運動会を楽しむ頃になると、黄色に熟したギンナンがポタン!と落ち始めます。そうになると、子どもたちや先生、保護者の方は牛乳パックと割り箸を持ってギンナン拾いの毎日となります。朝、そして子ども運動会をする前や途中にもギンナン拾いをします。でもそんなギンナンを誰も困ったものとしては見ていません。イチョウの木(自然)からの恵みを喜び大切にしようという思いでかかわっています。それは、1年を通していろいろなイチョウの姿を見たり、共にある生活を楽しんだりしているからこそ生まれてくる思いでしょう。また、「くさーい」と言う子どもに先生が「これがギンナンの臭いだね」と笑顔で答えたり、「うあー、いっぱい落ちている」と、落としてくれたんだねという思いで子どもも大人も喜んで拾ったり、踏んでつぶさないようにつま先だてでぎこちなく歩いたり…というかわりをする中でこそ生まれてくる思いでしょう。これは、樹齢98年のイチョウと共に、先輩の先生たちがずっと大切に育ててこられた、附属幼稚園の伝統の思いだとも言えるでしょう。

さて、拾い集めたたくさんのギンナンを子どもたちが新聞の上に広げ、割り箸で種を出していきますが、ここからの作業(種を出す・洗う・干す)は、子どもたちだけではできません。保護者の方がボランティアで何日もかけてしてくださいました。かなり大変なお仕事なのですが、「早く、きれいにできる方法を発見したよ」と喜んで伝え合いながら、「楽しいですよ」「来年はできないと思うと寂しいです」(年長児保護者)と、笑顔で積極的にしてくださいる姿には感謝の気持ちでいっぱいになりました。**<11月>** 緑の葉が黄葉し始めます。急に変わるのはなく少しずつ1枚の葉が、そして木の全体が変



わって行くのです。今年は、見事に黄葉した頃と入園選考で子どもたちが休園の時間が重なってしまいました。あまりにも残念だったので、毎日の様子を写真に撮っておき、後日、掲示しました。1週間の休園が明けた頃には、落葉し、園庭が黄色く染まります。風が吹くと一度にたくさんが落葉し、誰もが「うあー」とそのすばらしい空間に心動かされます。子どもたちは、1枚1枚の形や色の違いに気づきながら集め、束ねて楽しんだり、寝転んでふわふわの感触を楽しんだり、まきちらしてその様子を楽しんだり、そんな“黄色の世界”の中におうちを作って過ごしたりして遊びました。

干して白くなったギンナン(種)は、年長児が計ったり、袋に入れたりして、園中の子どもたちや先生に配りました。おうちの方には本当のお金のやり取りをする“ギンナン屋”を開きました。一袋90円です。値下げしたのではありません。100円持ってきてもらって10円(5円・10円を使って)のおつりを渡す経験をさせたいと考えての値段です。小学校、中学校の職員室にも出張販売し、先生方にも快く買っていただきました。さて、集まったお金をどうするのかを年長児が相談すると、「東日本大震災で困っている人たちに送る」という意見がたくさんでてきました。先生が「困っている人って?」と尋ねると、「おうちが流された人」「しんどいところがある人」などと答えます。“困っている”とは?に子ども、先生、保護者が共にもう少し時間をかけて話したり思いを寄せたりしながら決めていくようです。

イチョウの木のごとは、この紙面だけではなかなか話し尽くせません。どうぞ、皆さん、幼稚園のイチョウに出会いに来てください。今は、はだか木となって寒い中でも幹や枝が力強く、空に向かっています。春に芽吹く力をたくわえている生命力が感じられることでしょう。(2013年1月 記)



## ものづくりは人づくり

産業技術科学科准教授 原田 信一

平成24年4月1日付けで、技術科教育担当として着任しました。

かつて勉学に励んだ懐かしい関西に戻ることができたことをうれしく思います。

技術科の「ものづくり」では、作品の完成がゴールではなく、製作を通じて様々な技術的能力を身に付けさせるとともに、生徒の感性を育て、技術的素養をもった人格を形成することを目的としています。そして、そのことが結果として、個々の生徒の「生きる力」の育成につながり、さらには生徒の人間形成にまで学習の効果が期待できると考えられています。

そのような考えに基づき、技術科教育の有益さや人

間形成上の必要性について、大学の理論研究と学校現場の実践研究を結びつけた研究を進めています。

また、何より授業を通して子どもたちに、ものづくりの楽しさや喜びをいかに体験させるかを考え続けてきた経験を活かし、技術科教師を目指す学生達の教員養成等に携わる機会をいただいたことに感謝しております。現在、技術科の現職教員や教師を目指す学生達の、技術科教育に関する人材育成に喜びを感じております。

そして、伝統ある京都教育大学に勤めさせていただくことに、身の引き締まる思いです。

どうぞ、よろしくお願いします。

美術科准教授 日野 陽子

昨年4月、香川大学から本学美術科に赴任した日野と申します。専門は美術教育学です。多くの人が、義務教育課程を終えた後も、生涯に渡って美術に親しみ、自ら継続したいと思うような美術教育の在り方や可能性を探っています。

京都を中心に視覚障害がある人と無い人とで美術鑑賞や制作を楽しむ市民グループ「ミュージアムアクセスビュー」とは、既に十年近いお付き合いになります。見えない人と見える人によるこの共同活動は、徐々に全国にネットワークを広げ、これまで視覚芸術だと思われてきた美術の世界に新しい文化をもたらしつつあります。また、香川での最後の数年は、病院に長期入院している子ども達と共にアートプログラムを

体験したり、院内のアート環境を考えたりするホスピタルアートの世界に出会い、今春、開院する国立病院機構・四国こどもとおとなの医療センターのプロジェクトにも関わってきました。そこでは、退院していく子どもが、まだ入院中の子ども達のために匿名で手作りの贈り物を残し、退院後も何度も励ましの手紙や贈り物を届けにきたり、いつしかそれに返事やお礼を準備する院内の子どもが現れたり…といった暖かいエピソードが無数に生まれました。社会の中で、アートはどのような可能性や意義を持つのでしょうか。さまざまな立場にある人の思いと触れ合いながら体験することは、そのまま、学校現場や大学における美術教育に新しい窓を開くことになると考えています。

平成24年4月に発達障害学科に着任いたしました。早いもので、間もなく1年が経とうとしています。実は小学校1年生まで大阪に住んでいたのですが、それ以降はほとんど関東で過ごしてきたためすっかり関西弁を忘れてしまい、残念ながら今では京都弁と大阪弁の区別すらつかなくなってしまいました。

現在は障害児心理学を専門としていますが、もともとの専門は児童青年期の臨床心理学です。そのため研究を続けながら、学校現場でスクールカウンセラーとして勤務したり、精神科のクリニックで心理士として働きながら臨床活動を行ってきました。そこで出会った子どもたちが抱える問題について学び、実際に支援を行っていく中で、問題の背後に発達障害が存在して

いるというケースを少なからず経験し、いつの間にか障害児心理学が主な研究のテーマになりました。

さまざまな場所で働いて、さまざまな子どもたちと出会いながら、自分が身につけてきた障害児心理学や臨床心理学の方法論を一生懸命実践してきました。その中で、方法論も大切だけれども一番大切なのはポジティブであることだと考えるようになり、それぞれの子どものいいところを見つけて、それをできるかぎり発揮できるようにお手伝いしようとしてきました。なかなかうまく行くことばかりではありませんが、この気持ちを忘れずに研究と教育を続けていきたいと思っています。

## 学生とともに日本語を考えていきたいと思っています。

2012年9月に、国文学科講師として着任しました、中俣尚己（なかまた・なおき）と申します。どうぞよろしくお願い致します。私の担当科目は「国語学」ですが、これだけを見ても、何をするのかぱっとわからないかもしれません。これは、私たちが普段使っている日本語について考える学問です。例えば、正門の坂を下りた所に銭湯がありますが、そこには「ふられたら、どうぞ」という張り紙とともに、傘が置いてあります。なぜ、受身文なのか、「ふったら」とはどう違うのか、他の国の言語では受身にするのか？……と考え出すと、近所の銭湯から、一気に国際的なスケールに視野が広がるのです。

ことばの使い方一つで、印象が大きく変わることもよくあります。言語についてはまだまだわかっていないことも多く、学生の目線も頼りにしながら、一緒に

日本語について考えていきたいと思っています。



# 幼稚園の先生になって

京都教育大学附属幼稚園 教諭 外 園 知 子  
(幼児教育学科 平成7年度卒業生)

平成6年、3回生の時に附属幼稚園で教育実習を受けた。まず子どもの実態を把握し、全てがそこから始まる、見ているだけではみえてこないものを診ていくのだという話から、生活を共に作っていく幼児教育の心を学び、「幼稚園の先生になりたい」と夢を描いていた。それが現実となったのは平成8年。京都市の公立幼稚園に採用となった。子どもの思いを大切に、地域、保護者の方の熱い思いを生かしながら子どもの遊びや生活に取入れていくことを学んだ。

平成22年から縁あって、附属幼稚園に勤務している。附属幼稚園の教育はあの当時と変わらず、子どものためのゆったりとした時間が流れている。今年度担任している4歳児のAちゃんは、入園して間もない頃は緊張のためか思いを言葉にして表すことはほとんどなかった。5歳児への進級を目の前にAちゃんは「次は～しよう」と友だちと共に心を動かし遊びを楽しん

でいる。子どもの成長の姿に保育者としての喜びを感じている。研究していることと、子どもの姿、環境や教師の援助とが、リンクして捉えられ、子どもの発達を見据えた広い視野で子どもを見ることができるようになったことが大きな学びである。全国から注目される研究、学会での発表、教育実習生の指導と多くのことを学んでいる。大学に行く機会もあり、きれいになった大学会館に驚きながら、懐かしく感じている。学生当時には気付くことのなかった、幼教の先生の思いを感じ、改めて大学時代を振り返り感謝している。今、幼児教育は社会と共に変化の時にある。大学や附属幼稚園には幼児教育を牽引し、いつまでも子どもにとっての理想を貫いてほしいと願う。私も大学や附属幼稚園で学んだことを活かし、子ども一人一人が「幼稚園に来るの楽しい」と思えるようにいつまでも励みたいと思う。

# 自分と出会った一年間

吹田市立江坂大池小学校 教諭 小 松 優 子  
(教育学専攻 平成23年度卒業生)

初任の一年が、あと数か月で終わろうとしています。子どもたちの日々の頑張りや保護者の方のあたたかい眼差し、そして周りの先生方の支えなくしては一日も、無事に送ることができなかつたと感じています。何もかもがはじめてのことばかりの今年度、良いも悪いもなく、とにかく全力でやってみようという濃い毎日でした。

思えば、本学に在学中は、自分がこうして教諭として働くことになるうとは考えていませんでした。「子どもがすき」と笑顔で言い切る周囲の友人に、輝きを感じこそすれ、同じことを堂々と切り切るような自分は、正直どこにもありませんでした。

しかし、実際にこの仕事に就いてみて、「子ども」を育てる仕事ではなく「自分」を育てる仕事だという

ことが、だんだんと見えてきました。毎日、子どもたちに「どうなりたいのか」「私はどうなってほしいと思っているか」と語りかけ、向き合いながら、自分自身に対して同じことを問いつづけています。子どもたちの課題は、いつも私の中にもある課題だと感じます。では、どれだけその軸に向かって、私自身取り組めるのか。いつも、全く百点満点ではない私を、受け入れ、助け、育ててくれているのは、他でもない子どもたちだと思います。今も漠然と「子どもがすき」というわけではありませんが、私はクラスの「この子たちのここが好き」と言いきれるようになりました。その事に、子どもたちに、出会いに感謝して、これからも歩いて行こうと思います。

## 学生として、教官として過ごした京都教育大

京都教育大学名誉教授  
京都教育大学同窓会理事

杉本弘子

## 1) 私と京都教育大学

私は本学卒業直前に、家政科に残るよう声をかけて頂き、以来定年退官するまでの46年間、本学にお世話になった。退職後も家政科や大学全体の同窓会等の関わりを入れると、半世紀有余年となる。このことが、私が京都教育大をこよなく愛する理由の一つであろう。思うに、学生生活は極めて充実していた。授業をさぼったことはないが、時間があれば卓球に没頭していた。卓球用品店のご夫妻が元オリンピック選手だったとの事で、用具を買いに行く時はわくわくしたものだ。初心者の私は女子部員不足のため、入部と同時に選手に抜擢され、全国リーグ戦まで出場することになった。怖いもの知らずで、楽しい経験をしたのだが、この卓球の経験は私の人生を極めて意義深いものとした。研究生活も在職中を通してみれば、理解ある指導者や研究費にも恵まれていたといえよう。晩年には多額の概算要求が認められたり、特別経費が貰える等、連続して研究費を頂き、関連医療機器メーカーの商品類を根こそぎ買ったようで、「店頭で置く商品がない。お客様は教育大にお連れするから」と業者から冗談も出たくらい、充実した研究生活を送ることが出来た。

## 2) 勝手に命名「教育大のシンボル 楠木」

大学の正門を入ると見事な楠木が我々を迎えてくれる。新緑の頃の楠木はえもいわれぬほど美しい。私の入学時はさほど気づかなかった。本学が藤森に移転したのは、私が入学した前年（昭32）の秋である。爾来、半世紀の間に極めて立派に成長したのである。楠木は大学や神社等に多々植栽されているが、本学の楠木はやや傾斜の高台にあり、そのたち位置、容姿は見事である。大学を訪れる度にその雄大な姿に迎えられてほっとする。大学の移転時に多くの樹木が植栽され、壮年期に達したのである。樹木の成長を意識したのは、約20年位前である。桑の実がたわわに実り、地面に落ちて、構内を汚していた。学生たちと拾い集めては、ジャム作りもしたがさばききれない位であった。そのころ、学内のカリンやザクロが実をつけるようになり、花や果実で華やぐようになった。学内でこのような風情を享受出来るのは、



教育上良いことである。これは大学の当地への移転時に、教職員方々の自然に対する教育観の賜物、師範時代から受け継がれた高い志の所以であると考えられる。

## 3) 家政科同窓会の歩みと楷の木（別名：学問の木）

家政科同窓会は今年で創設57年目を迎える。平成18年には創設50周年を迎え、パーティーや記念講演会、50周年記念誌を刊行し、歴史を記録として残り、それを会員へ無料配布した。大学へは記念樹として楷の木を寄贈し、それがグラウンドの東南コーナーを彩る。楷の木は中国の孔子廟の回りに植栽されていることから、別名学問の木ともよばれる。本学に紅葉樹が少なかったので選択したが、教育大学にぴったりの銘木であると感心至極である。更に、家政科各研究室と共通実験実習室にもソーラー電波時計の記念品を贈呈し、学生の教育研究に資している。同窓会は毎年夏に総会を開催するが、中々の盛況である。

## 4) 賀茂川畔の「志波む桜」

春の賀茂川沿いは桜が見事に咲き誇り、人々を楽しませてくれている。しかし、ご存知だろうか。北は上賀茂神社から南は出町柳までの賀茂川堤に、計5000本を超える染井吉野の桜と楓の苗木を、京都府師範学校の教職員と生徒、児童によって植栽されたことを。賀茂川の美化と人材育成の拠りどころとして、明治38年に皆さんが醸金をして、苗木を購入して、植えられたと聞く。その偉業を示す碑が出雲路橋の西詰にたつ「志波む桜の碑」である。「志波む」は当時の師範学校を表したもので、植栽されてから110年近く経て、老齢化しているが見事な大樹である。師範学校時代の教職員や児童生徒の高い志に、畏敬の念を覚えるが、我々はその高い志を受け継いで、素晴らしい教師となる学生を育て、世に送り出していかねばならない。

## 5) 同窓会の今後

紙面の都合で、十分に意を尽くせないが、同窓会事務局を折角大学内に設置させて頂いたのだから、今後は学生や大学の役に立つこともしていなければならないと考えている。その一つとして、昨年秋の藤陵祭に学生の就職ガイド『トークショップ』を開催した。学生の参加呼び込みには苦労したが、20数名の学生の参加を得て、減多に聞けない企業就職や教師教育のあり方を講話、対話方式で聞くことが出来、参加者全員から極めて高い評価を受けた。今後も何らかの形で支えていけることを願っている。

## 第 131 号の読者の皆さまへ

京都教育大学広報誌「KYOKYO」をお読みいただきありがとうございました。

より良い広報誌を作成するため、皆さんからのご意見・ご要望をお待ちしております。

広報誌のご感想や今後取り上げてほしいこと、質問したいことなど何でも結構ですので、下記までお寄せください。

〒 612-8522

京都市伏見区深草藤森町 1 番地

京都教育大学企画広報課気付「地域連携・広報委員会」

E-mail : kouhou@kyokyo-u.ac.jp

## 131 号編集後記

広報紙「KYOKYO」第 131 号をお届けいたします。本号の特集は『京都教育大学における特別支援教育の取り組みについて』です。

平成 19 年 4 月から「特別支援教育」が学校教育法に位置づけられ、全ての学校において、障害のある幼児児童生徒一人一人の教育的ニーズを把握し、生活や学習上の困難を改善又は克服するための指導および支援を行うことが求められることとなりました。

それに伴い、本学においても、京都における特別支援教育の発展・充実に資するよう、平成 19 年～20 年度に実施された特別支援教育 GP「KYO の特別支援教育トライアングルプラン」を始めとして、現在まで様々な取組が行われてきています。特集では、それらの取組の成果と今後の課題・展望について、特別支援教育に深く携わる 3 名の教員にとりまとめていただきました。

また、今号の表紙を飾るのは附属幼稚園の安田拓生さんの作品、裏表紙は同じく附属幼稚園の大森奏さんの作品です。力強く、また可愛らしい作品をお楽しみください。

地域連携・広報委員会委員長 細川 友秀



### 地域連携・広報委員会

|      |       |                  |       |       |  |
|------|-------|------------------|-------|-------|--|
| 委員長  | 細川 友秀 |                  |       |       |  |
| 副委員長 | 丹下 裕史 |                  |       |       |  |
| 委員   | 齋藤 正治 | 西村佐彩子            | 吉江 崇  | 相澤 雅文 |  |
|      | 平井 恭子 | Andrew Obermeier | 丸山 啓史 | 富家 健治 |  |
| 事務担当 | 企画広報課 |                  |       |       |  |



京都教育大学広報 第131号

発行日  
2013年3月15日

編集  
地域連携・広報委員会

発行  
京都教育大学  
〒612-8522 京都市伏見区深草藤森町1  
電話 075-644-8125  
<http://www.kyokyo-u.ac.jp/>